

放射線化学の進む道

日本放射線化学学会会長

吉田 陽一



日本放射線化学会（以下、本会）が1965年に誕生してからすでに50年以上が経過した。放射線化学は放射線と物質の相互作用を理解する上で最も重要な学問分野の一つであり、その探索に多くの研究者が取り組んできた。最近ではこれまでの放射線化学にとどまらず、新しい応用分野にも広がりを見せている。

しかし近年、本会会員数は減少傾向にある。これは団塊の世代の研究者がリタイアを迎えている事情も関係すると思われるが、若い世代が新たなポジションを得られにくい状況も影響している。しかしながら、内閣府の調査では放射線利用の経済規模はおよそ4.4兆円弱（2017年）であり、10年前の調査と比較してもかなりの規模を依然として維持している。「光量子ビーム」は重要な取り組むべき課題と国の方針として謳われている。国際リニアコライダー計画等のビッグプロジェクト等に注目が集まりやすいが、光量子ビームの発展は、その応用を強力に推進することにつながることは必然のことであり、その際、放射線化学は大きな力を発揮する研究分野である。

本会、環境放射能除染学会、日本中性子科学会、日本放射化学会、日本保健物理学会、同位体科学会で“放射線サイエンス連合（仮称）”を設立する方向にある。ここでは、放射線利用についての情報交換をスムーズに行い、かつ、放射線利用をより発展させていくことを目的とし、放射線利用に関わる学会が一緒に協力していくことができるプラットフォーム作りを目指している。その契機として、各学会が合同で放射線サイエンス賞（仮名）を設ける運びとなった。

海外に目を向けてみると、欧米における放射線化学の国際会議は、ICIP（Gordon Research Conferenceの

後継）と Miller Conference がそれぞれ米国と欧州において隔年で開催されている。また、ICRR, ACRR, APSRC, IRaP, IMRP, Tihany, RadTech等の会議も健在である。その中で注目されるのは、会議の中で若手研究者を非常に大切にしていることである。

本会も若手研究者の育成の観点から、放射線化学若手の会へのサポートや国際会議の参加者への旅費サポートの事業を行っている。若手の会は、大学院生や若手研究者の努力とそれを支える先生方の支援により、「夏の学校」等を通して若手研究者間の交流が盛んになってきている。旅費のサポートは若手への強力な援助となっている。放射線化学討論会でも若手研究者の発表に対し賞を設けており、積極的な援助を行っている。これらの若手支援を継続的に行っていくことが重要と考えられる。

さらに、開かれた学会を目指して、本会会誌である「放射線化学」誌の1号から最新号までのアーカイブが近々に Web で公開される予定である。これは、先人たちの貴重なデータや業績を有効に活用できることになり、若い研究者にとっても重要な羅針盤になることが期待される。また、より広く本会の研究活動を知ってもらうために、日本アイソトープ協会の Radioisotopes 誌 66 巻 10 号に「最新放射線化学」として特集が組まれた。これは J-STAGE から閲覧可能となっている。

このような現状で、本会には研究分野の拡大や会員数の減少等への対策が求められている。このため今年度から副会長の増強を行い、これまでの国際交流委員会担当、編集委員会担当、事務局担当に加え、新たに、放射線サイエンス連合担当、研究推進担当を加えた5名体制となった。しかしながら、これらはすぐに解決できる問題ではなく、長い期間を見据えて解決すべきことである。会員の皆様にもより積極的な立場からご意見を賜り、ぜひとも本会の発展にご協力をお願いしたい。

The Path of Radiation Chemistry
Yoichi YOSHIDA (*The Institute of Scientific and Industrial Research, Osaka University*),
〒567-0047 大阪府茨木市美穂ヶ丘 8-1
TEL: 06-6879-4284, E-mail: yoshida@sanken.osaka-u.ac.jp